

TOPICS  
-4-トピックス…④  
酪農教育ファームで  
初の教育関係者セミナー

小学校の授業や体験学習で酪農教育ファーム活動を取り入れてもらうために、本会は2月7日、東京・港区の虎ノ門パストラルで、教育関係者を対象にした「酪農教育ファーム教育セミナーイン東京」を初めて開き、小学校の教員、教育関係者をはじめ、酪農家、指定団体など90人が出席した。

● 食と命の大切さ、酪農家の工夫を学ぶ  
新学習指導要領から酪農体験考える

席上、主催者あいさつした門谷廣茂専務は、「本会は平成13年から、酪農教育ファームに認証された牧場に安心して来てもらえる条件を整え、教育効果を上げてもらえるよう支援ツールを作成している。現在、酪農教育ファーム活動をしている牧場は全国で250ヵ所、酪農家戸数の1%を占めており、年間の来場者数は約70万人にのぼる。教育に関して素人の酪農家が、酪農教育ファーム活動をうまく行っていくためには、教育関係者の支援と指導が必要なので、このセミナーを機会に一層の支援をいただきたい」と述べ、酪農教育ファームに対する教育関係者の協力を求めた。

この後、文部科学省中央教育審議会専門委員を務める角屋重樹広島大学大学院教授が「新学習指導要領から考える酪農体験における学びの視点」と題して基調講演した。角屋教授は自らが策定に携わった新学習指導要領が目指すものとして、「基礎的・基本的な知識と技能の習得」、「思考力、判断力、表現力などの育成」、「学習意欲の向上」の3点を指摘した。

また、成長した命である食べ物を無駄にしないことや、相手を命あるものと考えて大切にすること、酪農家の仕事を観察・まねることで酪農家が工夫していることを発見するなど、酪農体験学習を通じて食と命とキャリア（仕事）について学ぶことができるなどと説明した。角屋教授は、「子どもたちを牧場に連れて行って、ただ、『調べてごらん、考えてごらん』では教育ではない。例えば、自分の家の庭と牧場を比べると、小学校にいる鶏と牛を比べて違いを調べさせるなど、子どもたちに気づくポイントを与えてあげること

が、価値ある酪農体験学習となる」と、酪農体験学習のポイントについても分かりやすく解説した。

● 酪農教育ファームの豊かな可能性に  
もう一度目を向ける必要ある・文科省

一方、セミナーでは、酪農教育ファーム活動を教育現場に取り入れた実践事例として、東京都の新宿区立東戸山小学校の國分重隆校長、練馬区立大泉小学校の横山弘美教諭がそれぞれの取り組みについて発表した。國分氏は、以前赴任していた小学校での酪農出前授業「わくわくモーモースクール」、横山氏は大泉小学校の近くにある小泉牧場での体験学習の内容について説明した。その後、セミナーの参加者は12班に分かれ、コーディネーターの文科省初等中等教育局教育課程課の田村学教科調査官の司会で研修内容のまとめと発表を行った。

セミナーを総括した田村調査官は、「酪農教育ファーム活動は教育上、非常に豊かな可能性があり、もう一度目を向ける必要がある。そのためには、教育関係者、行政、酪農家の専門性をうまくつなげることが大事だ」と述べ、酪農教育ファーム活動の重要性を改めて強調した。

